

■研究調査レビュー

離島における地域の人間形成と学校
 —沖永良部島・国頭小学校の1970年代—
 前田 晶子（鹿児島大学教育学部）

はじめに

「近代学校」とよばれる市民／国民の養成機関が日本に登場して百数十年を数える。80年代以降その機能不全が言われ、現在は教育改革というターニングポイントを迎えている。

本稿の目的は、学校と地域の関係を歴史的に分析することで、改めて学校の役割を問うことにある。学校が地域の人間形成においてどのように機能してきたのか、逆にいかなる困難をもたらしたのか。このような問題を、鹿児島県大島郡の沖永良部島を対象として考察していきたい。

「離島」における人間形成は、その地域性と密接に絡んで構成されているところに特徴がある。ここでの教育は、「島を離れる」ということを考慮しないでは成立しないし、また同時に「島に帰る」ことも想定されなければならない。このような対象に焦点をあてることで、子ども達の移動の中に地域の人間形成と学校との関係を浮かび上がらせたい。

以下、沖永良部島の北部・国頭（くにがみ）部落における近代学校の位置づけを歴史的に概観し、とりわけこの地域の農業における転換期となった1960-70年代の学校の役割について、教員の動向に着目しながら考察していく。外部世界（島外）への吸引力をもつ学校と、外部世界との関係を絶ってしまっは成り立たない離島の生活との間にどのような関係が結ばれてきたのか。また、それら高度成長期における両者の関係が現在のポスト産業社会に残した課題について考察する。

1. 沖永良部における「知」の系譜と 近代学校の登場

最初に、沖永良部島における学問の系譜を辿り、その上で近代学校の登場を確認しよう。

ここで取り上げる操家は、18世紀の終わりから続く島の名望家であり、またこの地方の知識人を代表してもいた一族である。五代担勁（1847-1923）は叔父などから漢学を学び、また流謫中（1862）の西郷隆盛に孟子・論語を教え受けたといわれ、20歳代後半には鹿児島島の造士館訓導らにも就いて漢学・医学を習得している。

一方、その息子世代はどのように学芸を身につけたのだろうか。その長男担春は、鹿児島県師範学校を卒業し、1898年に和泊高等小学校に勤めている（その年赤痢により死亡）。また、二男担水は鹿児島中学造士館に入学、三男の担道もまた鹿児島県立第二中学校に就学している。この二人は共に医者・医学博士として島外においてその生涯を過ごしている。

【操家の系譜】

四代 担裁（1825年生、戸長）
 五代 担勁（1847、知名村長、和泊村長）
 長男 担春（1876、和泊高等小学校訓導）
 六代 二男 担水（1886、岐阜県病院部長、医学博士）
 三男 担道（1893、九州大学教授、医学博士）

担勁の父担裁（四代）は、息子担勁に向けて操家の歴史を次のように伝えている。

汝ノ曾祖父担晋公ナルハ、幼ヨリ学文ヲ好ミ、又医業ヲ兼テ勉学シテ曾野蘊奥を極メ、又詩歌ニ長ゼシヲ以テ、島詰代々

がキ・ハ。茂つた木の幹にはセミが止まつていた。その下には数枚の木の葉が落ちていた。シマで見る木とは違つていたが、あるいは柿の木であつたのかも知れぬ。その次がぼくの大好きなハス・ハナだつた。[中略]あゝあの田芋のムジにあのような花が咲き、そこにあのような鳥がいたらなあ、と思うことだつた。(安藤, 1951年, 59頁)

学校の教材を通じて、島外の世界はインパクトをもって子どもに伝えられている。また、天長節についても次のように体験されている。

さて、この天長節だというと、青洩で糊付けした着物を平気で着ている。「汚れ人形」も小さつぱりとした晴着姿で学校へやつて来る。女の生徒はというと、いつもの頭の頂辺に小牛の糞を乗せたようなチンチクではなく、ヤマトハラジ(大和風の結髪)を結う。(同上, 62頁)

学校を通じて国家行事が村に伝えられるという全国的状況のなかで(大門, 2000年), 沖永良部島も例外ではなかったのである。

以上から、島内の知識人層において、近代学校は「大和」への入口として機能したのである。しかし、学校が島外から持ち込まれ、国民国家の統治機関としてのみ存在したと考えるのは早計である。実は、学校は村の生活の中で大きな位置を占めてきたのである。村民は自分たちの学校を親しみを込めて「わちゃ学校」と呼ぶ。

2. 「わちゃ学校」——国頭小学校の教員層

国頭小学校(以下国頭小)は、【表1】が示すように、当初は私宅に置いて開校されたものであった。1890年の改正小学校令を受けて、1898年には民家を用いた形態から脱し、現在の学校所在地に校舎を構えている。その後も、年限延長や高等科の設置、国民学校への改称など、教育関係諸令と対応しながら、

整備が進められていった。

【表1】国頭小学校年譜

M6	1873	井上忠太郎を召還して塾を開設、この頃十数名の師弟を教育した
M10	1877	国頭小学校創立(国頭字暗川、田中才治氏宅に設置、通称学校敷)、上低下等各八級をもつ
M15	1882	初等、中等、高等に分ける
M19	1886	尋常と高等の二等科に分け、尋常小学校を簡易科が代用
M23	1890	簡易科を廃止(実際には継続して教務を担当)
M27	1894	新小学校令実施布告されるが、校舎の不朽・狭隘の為延期
M31	1898	新小学校令実施、国頭大養花2904に設置(創立記念日)、世話人国分養利らは中屋中秋所有の国頭字新を予定していたが戸長坂本元明氏が反対「民家を離れた景勝の地」を主張した
M41	1908	義務教育年限延長、第五学年が編成(四・五年複式学級)
M42	1909	第六学年(五・六年複式学級)
T3	1914	単式の六学級編成
T10	1921	高等科(二か年)設置、国頭尋常高等小学校と改称
T15	1926	校地拡張
S16	1941	国頭国民学校と改称
S20	1945	空襲により全校舎焼失(10月仮校舎)
S21	1946	西校舎建築
S23	1948	国頭小学校(北側)と和泊町立第三中学校(南側)に分かれる
S24	1949	PTA発足
S27	1952	新校舎新築
S28	1953	日本復帰
S29	1954	本校舎新築(鉄筋二階建)
S32	1957	和泊三中と和泊一中統合、和泊中学校となり、第三中学校校舎敷地返る
S33	1958	生産教育公開、電話開通
S35	1960	完全給食実施
S39	1964	養護教員配置
S44	1969	沖永良部空港開港 竿打踊、中里節を町民体育祭に出演、喝采を博す
S45	1970	第三回大島地区教育研究会(算数)
S46	1971	島外修学旅行(徳之島)
S48	1973	「汐ほす母の像」建立、島外修学旅行(沖縄)
S49	1974	青少年問題協議会発足
S52	1977	台風九号(沖永良部台風)の直撃により学校校区内に多大な被害あり、町全体中心校公開、国頭校区教育振興会設立
S53	1978	町体育中心校公開、創立八〇周年記念式典挙行
S54	1979	修学旅行(鹿児島)
S55	1980	PTA活動文部大臣表象
S57	1982	第一回「汐ほし学習」実施
S58	1983	第一回「黒砂糖づくり」体験学習
S59	1984	「自然教室」開設
S62	1987	三味線クラブ復活(福島英良、村山英二氏講師)
S63	1988	パソコン2台、創立九〇周年記念式典及び事業(郷土四学習館、飼育舎等)
H1	1989	第一回ガジュマル祭、父親と語る会
H2	1990	ガジュマル音頭制定
H3	1993	「一坪農園」運動展開

註 『国頭字誌』より作成

国頭小の児童数は、【図1】にあるように1910年代以降上昇を続け、1940年代から60年代まで400~450人台で推移する。その後、

急激に減少し、90年代末には100人を下回るまでになっている。

このような状況の中で、教員組織はどのように推移していったのだろうか。【図2】は教員数の変化を示したものである。明治後期から見渡すと、

【第一期】1920年代までの10人未満の時代

【第二期】終戦までの急増期

【第三期】戦後の10～15人体制の時期に分類される。

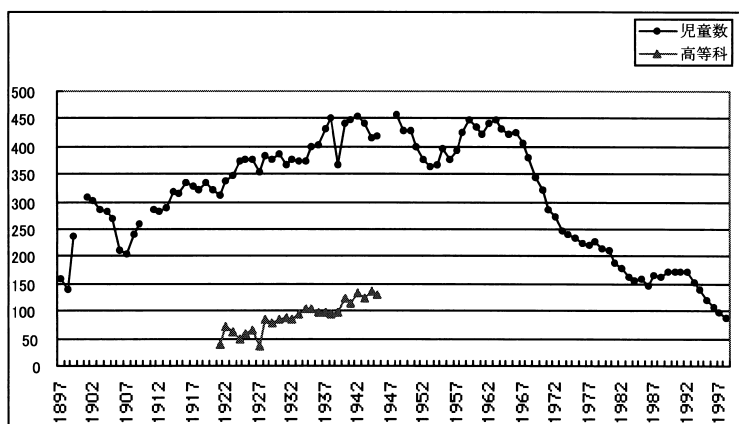
各期における教員の特徴をその在校年数からとらえていきたい。【表2】は、赴任年度別に、教員の在校年数をみたものである。

【第一期】では、教員数は全体としては一桁台にとどまるものの、長期在校者が半数以上を占める状況が見られる。また、この時期

の、地元出身教員の多さも注目される。ここから、この時期の国頭小には、地元出身の在校10年を越える教員が必ず数人は存在している状況があり、教員集団の属性において他の時期よりも地域との関係がより直接的であることが窺えるのである。

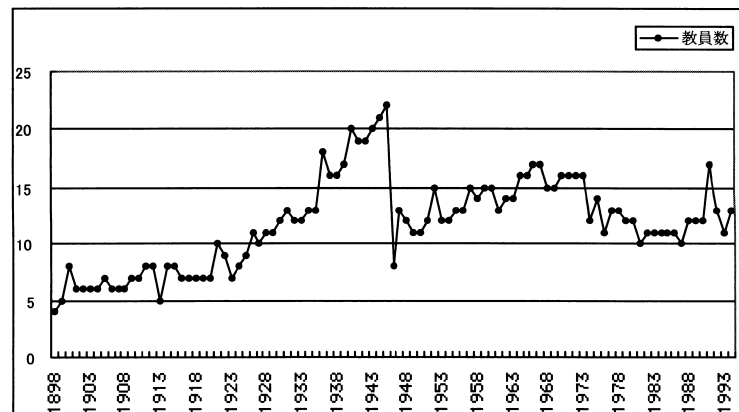
【第二期】になると、2年以下の短期在校者の数が増えるため、在校年数の両極化が見られる。この時期を特徴づける教員数の急増は、このような2年未満の教員によってもたらされていたことがわかる。児童数の増加に従って、教員数は増加するものの、それは決して安定したものではなく、一時的な補填という性格が強い。この時期の教室不足についての以下のような記述も同様に、学校が児童数の増加に対応できていない姿を露呈している。

【図1】国頭小学校児童数の推移



註 和泊町立国頭小学校『創立百周年記念誌』より作成

【図2】国頭小学校教員数の推移



註 『国頭字誌』より作成

【表2】国頭小学校教員在校期間の推移（赴任年度別）

	年 度	20年以上		10～19年		5～9年		3～5年		2年以下		教員数	地元出身	
第一期	1898-1902	2人	25%	3人	38%	1人	13%	1人	13%	1人	13%	8人	6人	75%
	1903-1907							1	25%	3	75%	4	4	100%
	1908-1912					3	43%	1	14%	3	43%	7	7	100%
	1913-1917					2	40%	1	20%	2	40%	5	2	40%
	1918-1922			2	29%	2	29%	1	14%	2	29%	7	3	43%
第二期	1923-1927	1	7%	1	7%	4	29%	2	14%	6	43%	14	5	36%
	1928-1932			1	8%	5	42%	3	25%	3	25%	12	6	50%
	1933-1937			1	5%	3	15%	5	25%	11	55%	20	1	5%
	1938-1942					7	24%	7	24%	15	52%	29	6	21%
	1943-1947			3	10%	3	10%	6	21%	17	59%	29	9	31%
第三期	1948-1952			2	8%	6	25%	5	21%	11	46%	24	12	50%
	1953-1957					3	19%	6	38%	7	44%	16	7	44%
	1958-1962			1	6%	8	50%	6	38%	1	6%	16	1	6%
	1963-1967			5	33%	1	7%	3	20%	6	40%	15	6	40%
	1968-1972			1	9%	4	36%	3	27%	3	27%	11	1	9%
	1973-1977					2	15%	5	38%	6	46%	13	3	23%
	1978-1982					6	40%	6	40%	3	20%	15	3	20%
	1983-1987					2	17%	8	67%	2	17%	12	0	0%
	1988-1992							16	91%	5	9%	21	0	0%

註 『国頭字誌』より作成

「地元出身」とは、島北部（国頭、西原、喜美留）を指す

「教室不足のため二部授業，後国頭集会場を仮校舎として借用して授業を継続したが諸々の不便を感じ一教室に二学級を入れて二人の先生協同で児童の訓育をなす」（1939年度学校沿革史）

[第三期]では，終戦直後の事情からか，一時的に地元出身の教員が多く採用されている。その後は徐々に減少し，80年代以降地元の教員はまったく姿を消してしまう。また，10年以上の長期在校者も70年代には採用されていない。一方，2年未満の教員も減少しており，80年代には「3年型」の定着が窺える。ここから，[第三期]には80年代を境として質的な転換があったと考えられるのである。

以上のような1980年代の「3年型」の定型化と地元教員の減少という状況とともに，かつてのような学校と地域の物理的連続性が失われ，代わって両者の新たな関係づくりが意識的に模索されたであろうことが予想される。

この中で，国頭小では60年代末から先田吉秀校長（在任期間：1969-74年度）を中心として郷土教育への取り組みが始まっている。以下では，教員へのインタビューをもとに，この時期の学校と地域の関係について考えていきたい。

3. 1970年代前後の学校と地域

1960年代の末から70年代にかけて，約10年間国頭小で勤めた島外出身の教員A氏に，国頭小での教育実践と地域との関わりについて訪ねた。彼は，ちょうど[第三期]の転換期直前の国頭小に赴任したことになる。A氏は，赴任当時の様子と，国頭での教員生活を次のようにふり返っている。

○歓迎会は職員室の机を全部合わせて，そうして机の上が舞台，その上に新しい先生を乗せて，芸をさせて，みんなで囃したてて，入学試験というのをした（笑）。

今はもうないでしょうね。(A氏)

○39年間教員をして、一番いい時代っていうとおかしいけれども、模範になる時代はね、国頭だったですね。[中略]あの時の自分の教師生活というのは、本当に満足だったですね。(A氏)

彼が語る国頭小は、教職数年目で赴任した若き教員に大きなインパクトを残している。

○永良部の子に教えていけば、30年、40年、50年後にはね、きっといい国頭、いい永良部をつくってくれるというのがあったです。絶対島に帰ってきてね、島を作ってくれるんだっていうのが強かったですよ。(A氏)

A氏をしてこのように言わしめる国頭小の教育活動はどのようなものだったのだろうか。

(1) 子どもに自信をつけさせる

A氏の語るこの時期の取り組みとして、地域(学校外)との関係づくりが注目される。まず、郷土教育として、この地域では失われつつあった三味線を次世代に伝えるべく、小学校において三味線教室が開かれた。この取り組みは、地域からの要望を受けて行われたものではなく、教員が「頭下げて」頼んでまわったところに特徴がある。そのような教員の行動は、生活に追われていた地域の人たちに支持されることとなった。

○[反響は]すごくよかったですよ。[中略]その当時の親は子どもの頃すごく貧しい思いをして育った所だったんですね。だから、そういうものをやって、みんなにこう聞いてもらったり[することが喜ばれた]。(A氏)

三味線教室の発表会は、和泊町の中心部(和泊公民館)で行われた。それは「国頭西原馬ん糞」と呼ばれていた当地域が威信を示すところとなり、その様子は現在鹿児島県内で高校の教員をしているB氏にも印象深く記憶されている。

○国頭小学校の力をみせてやろうっていうみたいな意気込みでやったんじゃないですかね。[中略]かなり入りましたよ。立ち見が出るくらい並びましたですね。

(B氏)

また、陸上競技の県大会や合唱コンクールなどの学校対抗の競技の場において国頭小が参加するにあたって、同様に地域の人々の支持を得ている。

○記録も、町の記録じゃなくて、あくまでもね、県の記録をねらってやったですね。実際に一人の子は県の新記録を作って、かなり長い間記録は残っておったんですけどもね。だから、そういうのに、国頭の人たちは喜んでくれましたね。(A氏)

○子ども達を鹿児島につれて、NHKの合唱コンクールに出場したんですよ。その当時にすれば大変なお金がかかったはずですけどね、子ども達をそうやって援助してくれた親って国頭なんですね。(A氏)

貧しい生活の中で、このように子どもに自信をつけられることが可能なのは学校だけであり、だからこそ教員のこのような取り組みが地域住民に支持されていったという経緯がここに見えてくる。また、国頭の島内での低い位置づけが、逆に強い学校支持となって現れているものと思われる。つまり子どもに自信を持たせることが、同時に地域の威信を高めるものでもあったのである。

(2) 外界で生きる力の養成

もう一つの教員の役割としてインタビューから見てきたのは、島外に出ても生きていける力の養成である。それが端的に現れているのが方言の矯正と共通語の習得である。A教員が島に赴任した際にも、校長から「きれいな言葉」(共通語)を子ども達に教えてほしいと言われたという。また1960年代半ばに小学校時代を過ごしたB氏は、学校にいる間

は教室以外でも共通語を話すことが求められたと語る。

○方言を使ったら罰則を与えられたんですよ。[中略]共通語で言えない部分があるんですよ。それを「方言でいえば～」と断ればいいことになったんです。

[中略]学校生活全部だから苦しいわけですよ。方言でしか表現できない部分っていうのは沢山あるのよ。特に遊びの中ではね。(B氏)

○(Q:方言を大事にしようという先生はいなかったですか。)その時の雰囲気はですね、内地に行ってもきちっとしゃべれるような人間にならなきゃいけないという風潮が強かったんじゃないかな。方言しゃべるんか、別にその我慢することないちゅう先生は一人もいない。[中略]親の要求でもあるわけですよ。そこに残るのは一人[長男-引用者]ぐらいしか残れないから。あとの子ども達は、そういうふうに指導してもらいたいちゅうのは多分にしてあったんじゃないかな。だから、それでだいぶん[方言が-引用者]潰されてはきた。(B氏)

○あの頃は、島の先生ではなくて、鹿児島先生、本土の先生をというのがあったんですね。僕はそれはね、過ちだったと思うんですけども。丁度その頃です。方言を使わない、とかね。それから、島の方言の歌を、いわゆる共通語に直して歌わせるというね。(A氏)

このように、共通語の奨励は学校内で徹底して行われていたようである。さらに、当時の島の経済状況から二三男以下は島外で職を得ることが余儀なくされていた中で、共通語指導は親からも支持されるものであった。

○俗に言う受験学力みたいなものはない。むしろ、地元としては、正直いって、今でいう生きる力ちゅうのかな。その、あの、学問はなくてもいいから、とにかく

その自分で。だから、一番重要なのは人望なんだ。自分で飯が食える、世の中に出て飯が食える人になれ。人に迷惑かけて後ろ指指されるような生き方をしないでちゃんと人の中に入っていても生きられるっていうことが基本で教えたような気がする。(B氏)

○やっぱり、自分の子どもはね、外でもっと羽ばたいてもらいたいっていう願いがあるんじゃないですかね。自分たちはもう、今の親の親ですね、60代70代の人たちは、島から出ることが出来なかったですからね。出たくても出れない。(Q:出ることが出来ないという思いがある…)だって、鹿児島を「内地」っていうくらいで、自分たちは占領地だったわけですよ。それこそ密航して鹿児島に行ってた人たちですからね。[中略]出ても、結局仕事が、技術はもってないですしね。(A氏)

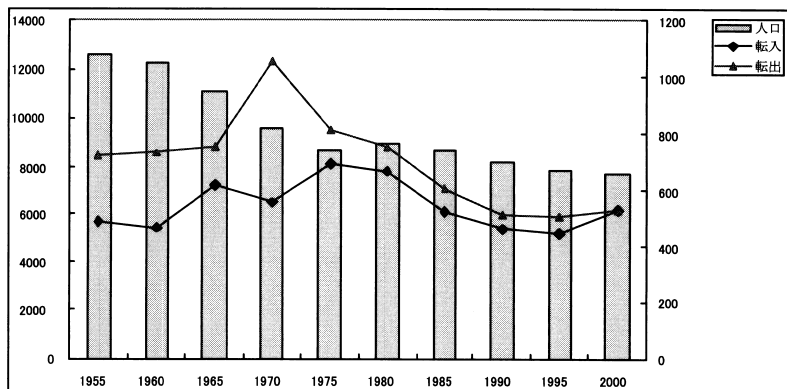
このように、学校は、村を離れて外界で生きていく力の養成を担ったのである。

(3) 国頭の1970年代

【図3】は、共通語教育が推進された背後の事情をよく示している。A氏が赴任していた70年代当時は、転出者の数が突出しているのがわかる。高校卒業後、1968年に進学のため上京したB氏によると、沖永良部高校の卒業生の3/4が就職し、その多くが集団就職として島を離れたという。また、【図4】にあるように、1975年以降は中卒者が殆どいなくなるため、この時期の学校への依存度(信頼度)は高まっていたと推測される。

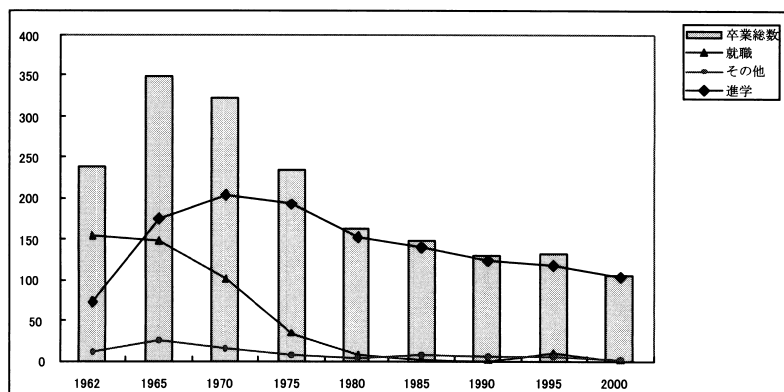
さらに、この時期の地域の農業にも留意する必要がある。A氏は、1960年代の終わり頃から、農協を通さずに独自に市場を開拓していく一部の農家の登場によって地域の農業が変化していくのを学校の中にも感じていたと話す。

【図3】和泊町の人口と転入出



註 人口は「国勢調査」、転入出は住民課資料による

【図4】中学校卒業後の進路



註 学校基本調査より作成

○国頭の農業が変わってくる時期だったんですよ。というのは、サトウキビ、小芋をつくったり、園芸をしたりして、そしてしかも農協を通さずにね、自分たちでその市場を開拓していくという。[中略]いわゆる当時は珍しい一千万農家というのを作っていったわけですね。だから、非常になんというか開拓心といいますかね、このままじゃいけないんだっていうのは、そういった貧しさからですよ。

(A氏)

農業の変化は、この地域の「開拓心」を高めながら、貧しさからの克服を目差していたのである。

これらの要素が重なる中で、学校教員の役割は1970年代にはとりわけ地域で注目されるものとなったと考えられる。A氏は教員生

活の中で国頭小時代を「いい時代」と位置づけたが、実は国頭小にとっても1970年代はもっとも地域から期待された時代だったといえるのである。

小 括

1970年代に国頭小で学んだ子どもは、郷土教育として習った三味線や踊りは出来るものの、方言は話せないといわれる。現在、このような矛盾が気付かれはじめている。このことは、学校を通じた島と島外との関係が変化してきていることを示している。70年代以降、農業収入の上昇により豊かになった島の生活と、情報化の中で一層島の文化が伝承されにくい状況において、高度経済成長期の残した課題を総括し、改めて学校の役割を問うことが必要である。

これまでのように島外世界への入口として一方通行的にのみ機能するのではなく、島と島外を相互につなぐ媒介的役割を果たす必要があるのではないか。例えば、僻地の小学校で取り組まれている留学制度はこの一例であろう。離島における学校の役割の問い直しは、学校をめぐる一般的な課題にも大きな示唆を与えるものと考えている。

[参考文献]

- 安藤佳翠, 有川貞辰編『操家履歴』1982年
和泊町公民館『沖永良部島郷土史資料』
1956年
大門正克『民衆の教育経験』青木書店,
2000年
国頭字誌編纂委員会編『国頭字誌』1995年
国頭小学校「沿革史」
和泊町立国頭小学校『創立百周年記念誌』
1999年